

石炭産業の終焉はいかに記録／記憶されたか

——NHK アーカイブス学術利用トライアル研究から——

甲南女子大学 木村至聖

1 目的

Olick (2007) は、集合的記憶には二種類あり、**collective memory** と **collected memory** に分けられると論じている。前者は、個人的・心理的な過程に還元されない、現在の目的に合わせて構築されるポリティカルな集合的記憶である。その一方で、後者は、必ずしも集合性の存在を前提とせず、個人の記憶が社会的に枠づけられているという意味での集合的記憶である。これらは本来コインの裏表なのだが、その関係性については十分に考察されてこなかった。そこで本研究では、テレビドキュメンタリーに記録された石炭産業の記憶に注目し、そこにおける **collective memory** と **collected memory** の関係について考察する。石炭産業に注目したのは、それが国家の近代化の軌跡という 100 年に及ぶナショナルな記憶に結びつきつつも、戦後約 40 年間の段階的合理化の歴史を通じてつい 10 年ほど前に終焉を迎えたばかりであるため、個人の記憶も鮮明であり、**collective memory** と **collected memory** が交差し合う現場といえるからである。

2 方法

データとしたのは、NHK アーカイブス学術利用・関西トライアルⅡに採用された研究に基づいて閲覧した 146 の番組である。今回はとくにこれらのうち、1960 年代より八次にわたり展開されてきた石炭政策が終了した 1991 年を区切りとして、それ以後に閉山した国内 3 炭鉱、すなわち九州の三池炭鉱 (1997 年閉山、9 番組)、池島炭鉱 (2001 年閉山、4 番組)、北海道の太平洋炭鉱 (2002 年閉山、4 番組) に関する番組を分析の対象とした。

3 結果

3 つの炭鉱に関する番組の比較をすると、その表象のされ方に顕著な地域差があることがわかる。他の 2 つの炭鉱に比べて、三池炭鉱では明治以降の 100 年におよぶ歴史がそのまま日本の近代産業史と重ね合わせられ、**collective memory** として参照される傾向があった。これは三井三池争議や戦後最大の炭鉱事故と言われる三川坑炭じん爆発事故があったためと考えられるが、実際の番組のなかでは、労働争議 (労働組合の分裂) による分断、事故の後遺症 (CO 中毒による記憶障害) による断片化・破壊という、集合的記憶の不可能性を示す事例が多く見受けられた。つまり、三池炭鉱は「日本の近代化を支えた」という **collective memory** と関連づけられるものの、テレビドキュメンタリーに記録された人々の **collected memory** の語りは、それと内容的にほとんど重なり合うことがなく、**collected memory** が断片化されたまま **collective memory** が生み出されていることがわかった。その一方で、三池とは逆に池島、太平洋に関する番組では、「働くのが生きがい」「息子がもし炭鉱で働きたいといえれば、そのとき炭鉱があれば (認めたい)」といった「誇り」につながる **collected memory** も存在したが、番組自体はもっぱら「現在」の状況に焦点化していたため、それらが **collective memory** につながることはなかった。

4 結論

以上のように、国内石炭産業の終焉を迎えるにあたり、テレビドキュメンタリーが記録した石炭産業の記憶は、**collected memory** と **collective memory** のすれ違いとして表象されていることが明らかになった。しかし、記録された人々の **collected memory** から、現在主流のものとは異なる **collective memory** を構築する可能性は常に開かれている。今後はその観点から **collective memory** の検証が進められる必要があるだろう。

【参考文献】 Olick, Jefferey K., 2007, *The Politics of Regret: On Collective Memory and Historical Responsibility*, New York: Routledge.